千葉県八千代市

埋蔵文化財発掘調査報告

昭和62年度

八千代市教育委員会

目　　次

1．発掘調査に至る経過 …… 1頁
2．遺跡調査の概要 …… 3頁
a　田原窪遺跡 …… 3頁
b　台畑遺跡 …… 6頁
c　菅地ノ台古墳 …… 9頁

挿図・図版目次

第1図　八千代市全域図 …… 2頁
第2図　田原窪遺跡実測図 …… 4頁
第3図　出土遺物実測図 …… 5頁
第4図　台畑遺跡実測図 …… 7頁
第5図　菅地ノ台古墳測量図 …… 11・12頁
第6図　菅地ノ台古墳実測図 …… 13頁
第7図　菅地ノ台古墳出土遺物実測図 …… 14頁

図版1　田原窪遺跡 …… 3頁
図版2　出土遺物 …… 5頁
図版3　台畑遺跡 …… 8頁
図版4　菅地ノ台古墳 …… 9頁
図版5　菅地ノ台古墳 …… 14頁

1．発掘調査に至る経過（第１図）

全国各地おいて開発の波が押し寄せている現状で、当然のことながら，埋蔵文化財の発掘調査も急激に増加している。本市においても例外ではなく増加の一途をたどっている。このため、発掘調査を担当する専門職員も増員せざるをえず、現在は４人で当たっている。

このほど、文化庁より昭和61年４月28日付けで「開発と文化財の取扱いについての調整、調査等に関する事務処理等の標準について」の文書が千葉県教育委員会経由で通知された。内容は主として宅地開発事業者に対し埋蔵文化財への早期の対応を促すもので、そのため、遺跡範囲確認調査は遺跡の周知事業の一環として市町村教育委員会で行なうべきということである。このことから遺跡範囲確認調査について国庫補助事業として実施することになり、本市では市内すべての遺跡を対象にするため「八千代市内遺跡群」として、今年度より実施することになった。

ここで今年度はこの「八千代市内遺跡群」として国庫補助200万円、県費補助100万円を得て総額400万円で実施し、田原窪遺跡、菅地ノ台古墳、台畑遺跡の３遺跡を調査した。

田原窪遺跡①は、真木野・佐山地区の大日本土木株式会社が大学と住宅建設を実施中であり、その内の住宅区域の一部で、佐山字田原窪1780外に所在する12,000㎡を遺跡の確認調査のため昭和62年12月２日より同月25日まで実施した。

菅地ノ台古墳②は、金子米蔵氏が自宅を増築するため、萱田字菅地台439－４の崖を削りたいとの話があり、その台地には古墳が所在するので協議した結果、擁壁の安全角度を考えるとどうしても周溝部分までかかり、その部分である400㎡を調査することになり、昭和62年12月16日より同月23日まで実施した。

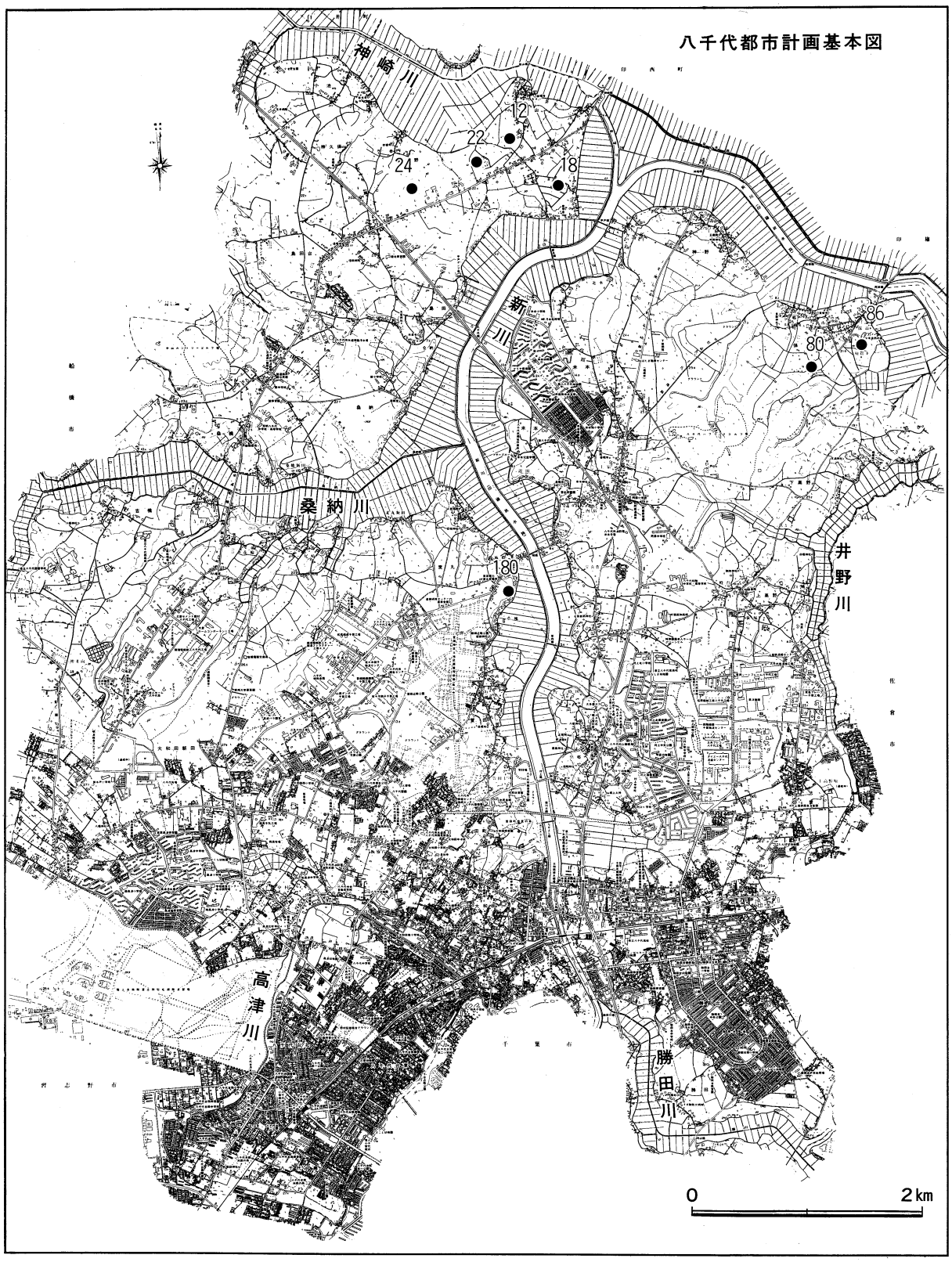
台畑遺跡③は、元祖玉屋花火店が現在使用している保品字台畑1439外に所在する6,100㎡の花火工場が、老朽化したことにより建替え工事を計画していたが、その場所が周知の遺跡であったので、協議した結果、花火工場という特殊性により、遺跡の現状保存が可能なので確認調査のみを昭和63年１月７日より同月14日まで実施した。

（木原　善和）

①　（分布地図No.22の佐山台遺跡より分離）

②　（分布地図No.180）

③　（分布地図No.80）



第1図　全域図（1：50,000）

2．遺跡調査の概要

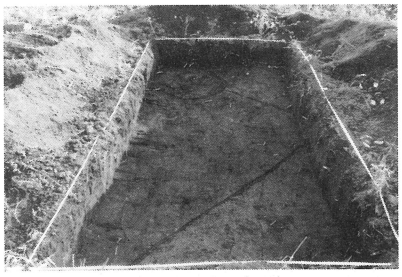
a、田原窪遺跡（第２・３図　図版１・２）

遺跡の立地　田原窪遺跡（分布地図No.22の佐山台遺跡より分離）は、八千代市北部を東へ流れる神崎川の南岸台地上の平坦面から北斜面にかけて位置している。標高は10mから21mである。遺跡内には田原窪古墳（円墳・１基）と塚１基が所在する。今回調査した区域は南へ入り込む浅い谷とその両側台地斜面部である。同台地上には遺跡の数も多く、佐山貝塚（分布地図No.12、縄文時代中期・後期）・道地遺跡（分布地図No.18、弥生時代後期）や東山久保遺跡（分布地図No.24、古墳時代後期）など時期も各時代に渡っている。

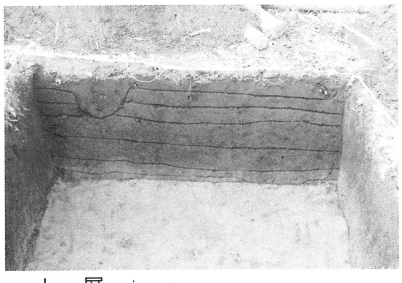
調査の方法と経過　確認調査は田原窪遺跡西側部分の12,000㎡に対して実施した。掘削方法は住居址確認に主体をおいたためグリット・トレンチ法を採用し、10m四方の中に２m×４mの基本トレンチを１つ設定した。遺構確認は台地上ではソフトローム上面にて観察したが、斜面部では第Ⅲ層下位にて一度観察し、最終的にはローム層上面まで堀り上げた。セクションラインは南北１本・東西２本を設定した。調査は昭和62年12月２日より開始し12月25日に終了した。掘削作業は３日より24日にかけて実施、セクション実測及び遺構写真撮影は16日より24日にかけて実施、遺構平面実測は随時実施した。実質調査日数は20日間である。

図　版　Ⅰ　田原窪遺跡

近　景

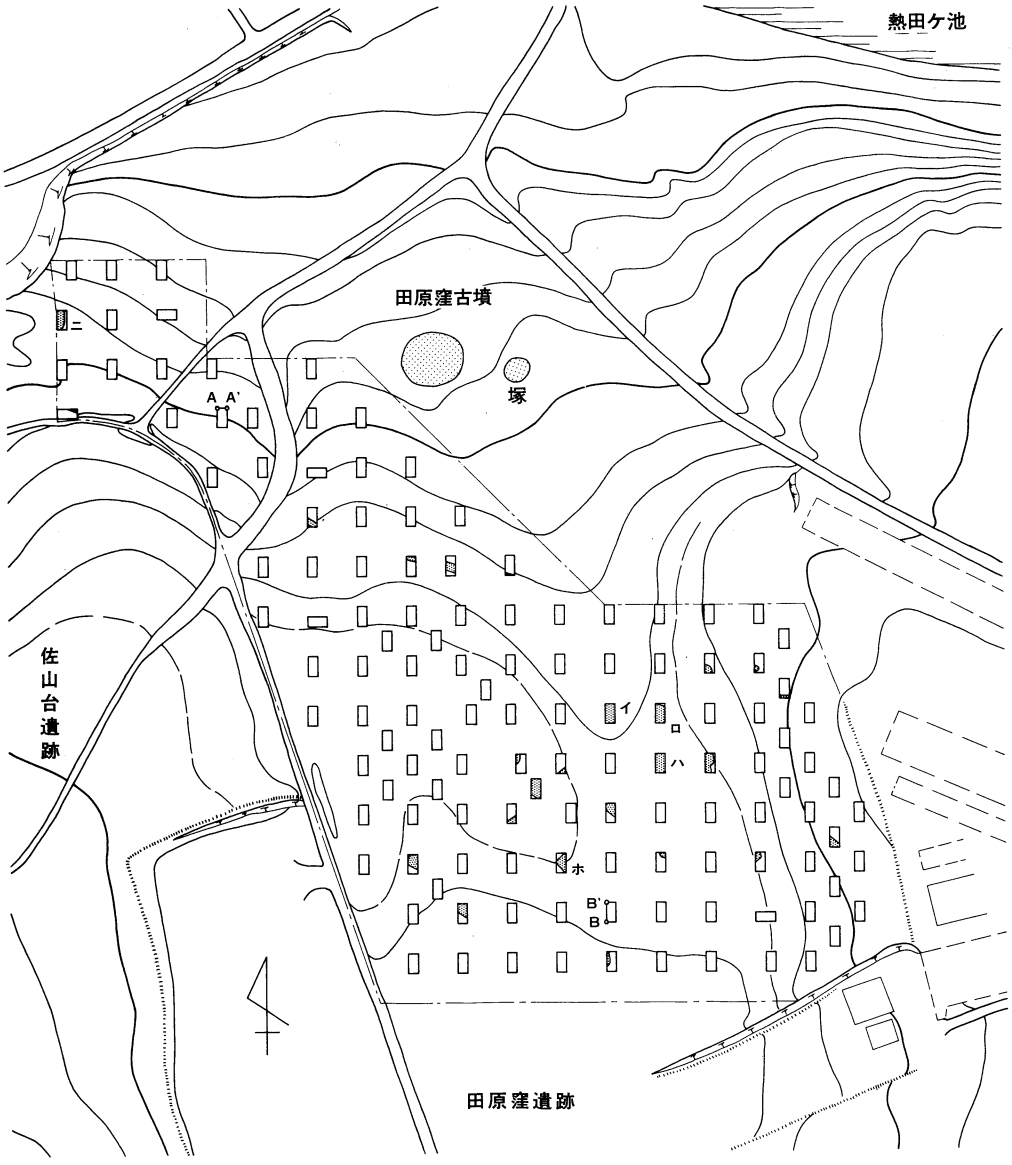


住居址　確認状況（ホ）

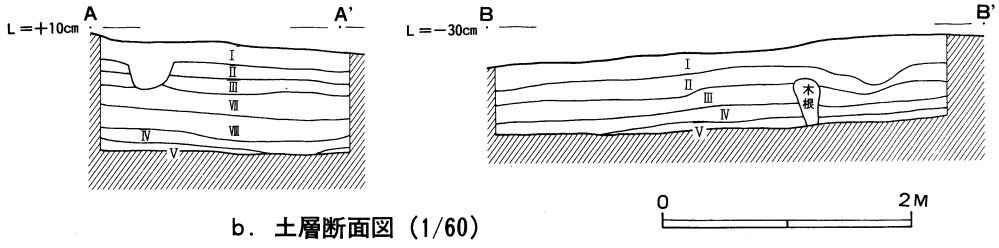


土　層

発掘風景

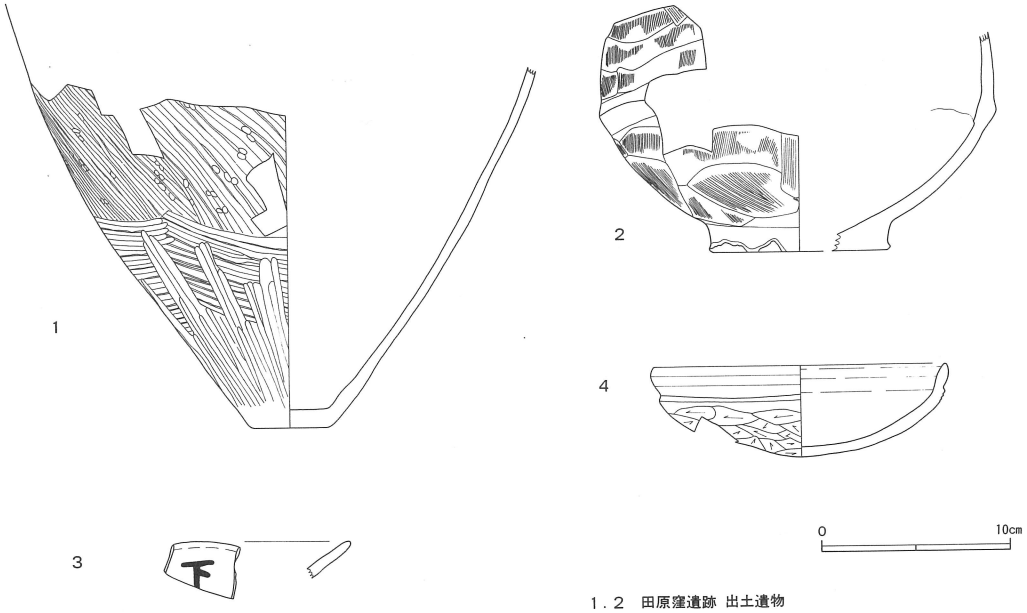


a．遺構確認図（1/1500）



b．土層断面図（1/60）

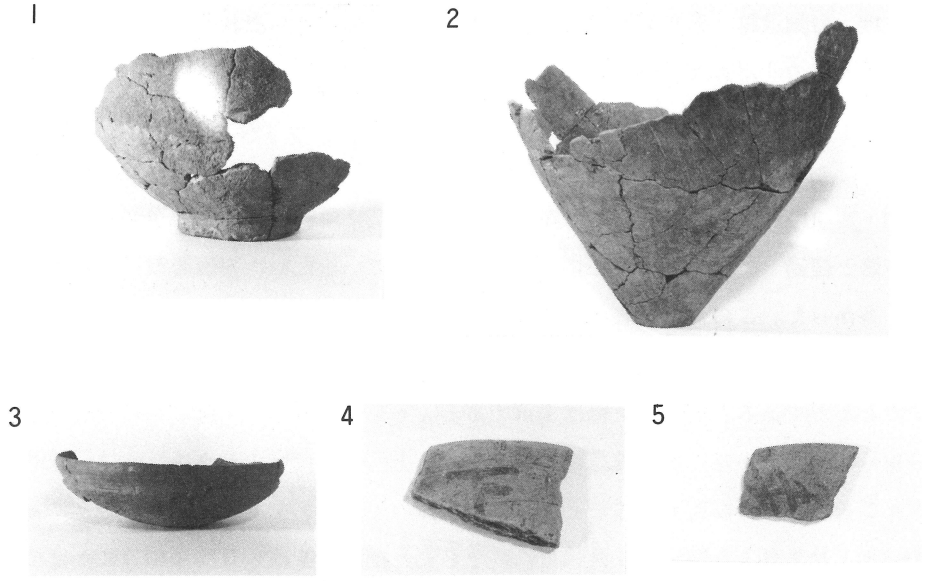
第２図　田原窪遺跡実測図



1．2　田原窪遺跡 出土遺物
3．4　台 畑 遺 跡 出土遺物

第３図　出土遺物実測図

図 版 2　出 土 遺 物



1．2　田原窪遺跡　3．4　台畑遺跡　5．菅地ノ台古墳

調査の概要　本遺跡の層序は、第Ⅰ層褐色土層・第Ⅱ層黒色土層・第Ⅲ層暗褐色土層・第Ⅳ層ソフトローム層・第Ⅴ層ハードローム層が基本となるが、斜面部及び谷部では第Ⅲ層と第Ⅳ層の間に、第Ⅵ層暗褐色土層・第Ⅶ層暗褐色土層・第Ⅷ層暗褐色土層が堆積している。今回の調査により住居址19軒・古墳周溝１条・溝２条、pit １基を検出した。遺構の詳細な事については今後の調査を待たなければならないが、出土遺物は土師器（五領期・鬼高期・国分期）が多く、特に五領期が主体を占めていることから、古墳時代前期から歴史時代に至る集落址を想定することができ、特に古墳時代前期が中心となるものと考えられる。集落址は調査区域南側部の台地斜面部より浅い谷にかけて展開しているが、台地上平坦面までには達していない。浅い谷の谷底部にて検出した住居址（イ・ロ・ハ）については掘り込みがロームまで達してなく、暗褐色土上に床が構築されていた。古墳周溝㈡は隣接する佐山台遺跡中の古墳（半壊・墳形不明）に伴なうものである。グリット出土遺物は土師器の他に縄文土器片（中期・後期が主体）が出土している。加曽利Ｂ期の深鉢が復原できているが遺構に伴なうものでなく、第Ⅱ層中より出土している。遺物は主に第Ⅱ・Ⅲ層中より出土している。

小　　結　調査の結果、遺跡西側の南半分には五領期を中心とする集落址が展開していることが判明した。台地上平坦面ではなく、浅い谷の斜面部・谷底部に展開するのが大きな特徴である。

（蕨　茂美）

ｂ．台畑遺跡　（第３・４図　図版２．３）

遺跡の立地　台畑遺跡（分布地図№80）は、八千代市北部を東へ流れる新川の谷から南西方向へ進入してくる谷の北岸台地上に位置している。台地は舌状台地となっており、遺跡は南側の縁辺部より北側の平坦面にかけて広がっている。標高は21ｍである。今回調査した区域は、平坦面が中心で縁辺部へはほとんど及ばない。舌状台地先端部分に、おおべた遺跡（分布地図№86、弥生時代後期・古墳時代前期～後期）が所在するなど、周辺に所在する周知の遺跡は少なくない。

調査の方法と経過　調査区域は現在畑として利用されているため、表面観察による土器片の散布も著しく多かった。このため調査の主体を住居址確認において進めることにした。掘削方法は工事の内容により建物の基礎部分に対してのみトレンチを入れることになったため、四角形のトレンチがほとんどである。トレンチ幅は１ｍである。トレンチ番号は１棟ごとに番号をつけていき、最終番号は14番である。遺構確認はソフトローム上面にて行い、セクションは直線的な設定が不可能なことと耕作の影響もあることから、好条件のトレンチを選び実測することにした。調査は昭和63年１月７日より開始し１月14日に終了した。掘削作業は８日から13日にかけて実施、遺構写真撮影は12・13日にて実施、セクション調査は13日に実施、遺構平面実測は12・13日にて実施、埋め戻し作業を14日に実施した。実質調査日数は７日間である。

第14トレンチ
第13トレンチ
第10トレンチ
A'
A
第9トレンチ
第11・12トレンチ
第8トレンチ
第7トレンチ
第6トレンチ
第3トレンチ
ロ
ハ
第5トレンチ
第1トレンチ
第4トレンチ
第2トレンチ
イ
0
30M

a．遺構確認図（1/900）

A
A'
L＝21.300M
I
II
III
IV

b．土層断面図（1/60）

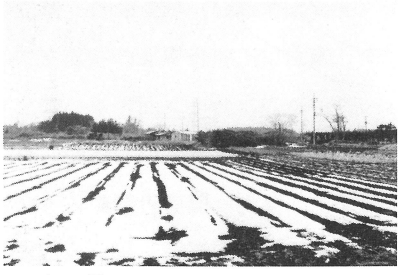
0
2M

第４図　台畑遺跡実測図

調査の概要　本遺跡の層序は、第Ⅰ層暗褐色土層（耕作土）・第Ⅱ層暗褐色土層・第Ⅲ層ソフトローム層・第Ⅳ層ハードローム層である。今回の調査により住居址15軒・pit 29基を検出した。遺跡の詳細な内容については後の調査を待たなければならないが、出土した土器片は土師器片が多く、特に国分期が主体を占めている。数量は多くないが須恵器片も出土していることからも考えて、集落址の中心となる時期は歴史時代（国分期）を想定することができる。第２トレンチ出土の土器片より鬼高期の坏が復原できていることと大型の住居址を検出していることから考えて、古墳時代後期の集落址の存在も窺える。第３トレンチからは『下』と書かれた墨書土器片（国分期・皿・口縁部破片）が出土している。カマド（白色粘土及び山砂）を確認した住居址（イ・ロ）は２軒である。集落址の展開は台地縁辺部に近づくに従がって濃くなってゆくと考えられる。住居址の確認できなかったトレンチ周辺部においても土器片の散布は多いので遺跡としての広がりを考えることができる。住居址未検出トレンチ（調査区域北側部分）においては縄文土器片（中期・後期、第３トレンチ出土加曽利Ｅ期甕胴部の復原有り。）が多く出土しているが、遺構に伴うものではない。遺物は耕作土中にも多く含まれているが、第Ⅱ層中に含まれていたと考えられる。

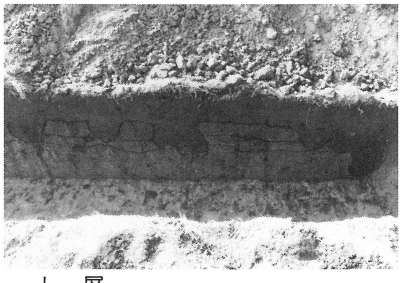
小　　結　台畑遺跡南側部には国分期を中心とする集落址が展開していることが判明した。遺跡全体としては今後の調査に負うしかないが、本遺跡周辺地域における調査例は少ないので貴重な資料となった。　（蕨　茂美）

図　版　3　台畑遺跡


遠　景

発掘風景（第５トレンチ）

住居址確認状況（ハ）


土　層

c．菅地ノ台古墳（第５・６・７図　図版２・４・５）

遺跡の立地　菅地ノ台古墳（分布地図№180）は、新川西岸の標高約22～23mの台地縁辺部に位置する。墳頂南側斜面において一部攪乱を受けるが、概ね良好な遺存状態である。目視による観察では、円形状を呈し、西側畑部分を除いては周溝の存在を想定することができる。規模は、周溝を含めて直径約22～24m、高さ約1.5mである。

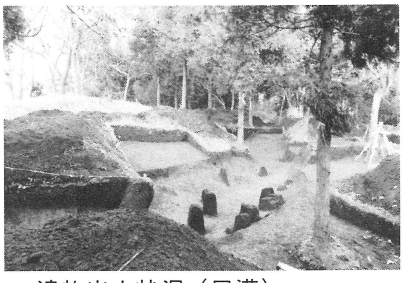
調査の方法と経過　調査方法は、古墳の周溝の確認を目的としたトレンチ及び台地縁辺部における遺構の確認を目的としたトレンチを各々設定した。１～３トレンチについては、前者を目的としたトレンチで１トレンチは、墳頂の任意の基準点から真南方向に幅2.5mで設定し、３トレンチは、同様に真東方向に幅２mで設定した。２トレンチは、両者の間に任意に設定した。また４トレンチは、等高線に平行した形で南北方向に幅２m、全長21mのトレンチを設定した（第６図)。調査の経過は、野外調査を昭和62年12月16日～同12月23日の期間をもって実施し、室内整理は昭和63年１月20日～22日にかけて行った。以下経過について述べる。12月16日～17日器財等搬入後トレンチの設定、４トレンチの掘り下げ、18日４トレンチ埋め戻し後１～３トレンチの掘り下げを行う。19日１～３トレンチを拡張し周溝の平面形について確認を行う。21・22日周溝の精査、全景写真撮影、図面類作成を行う。23日一部図面作成を行い調査を完了する。翌昭和63年１月20～22日出土遺物の水洗、注記、接合、図面等整理を行う。

図　版　4　菅地ノ台古墳

遠　景

近　景

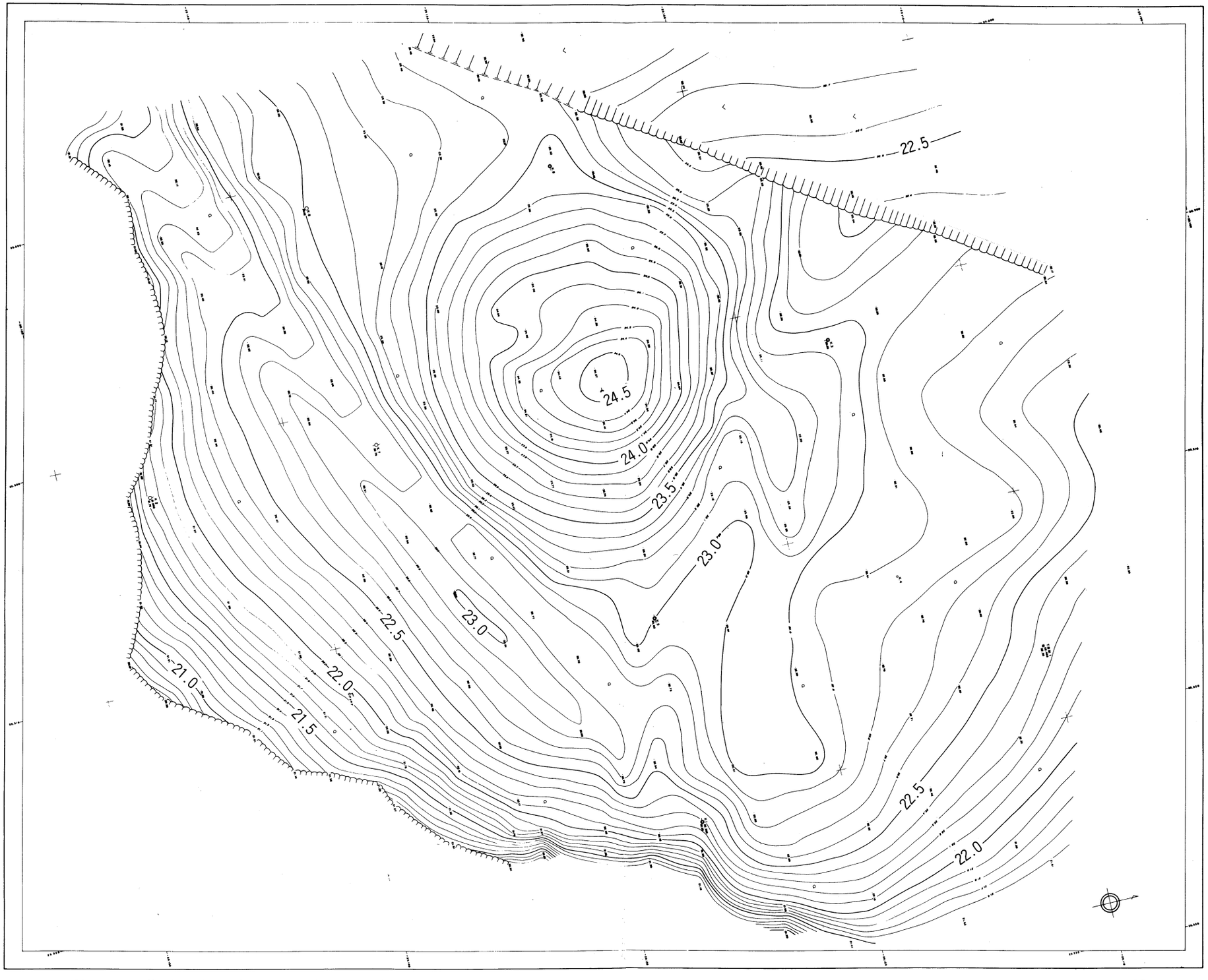
周溝確認状況



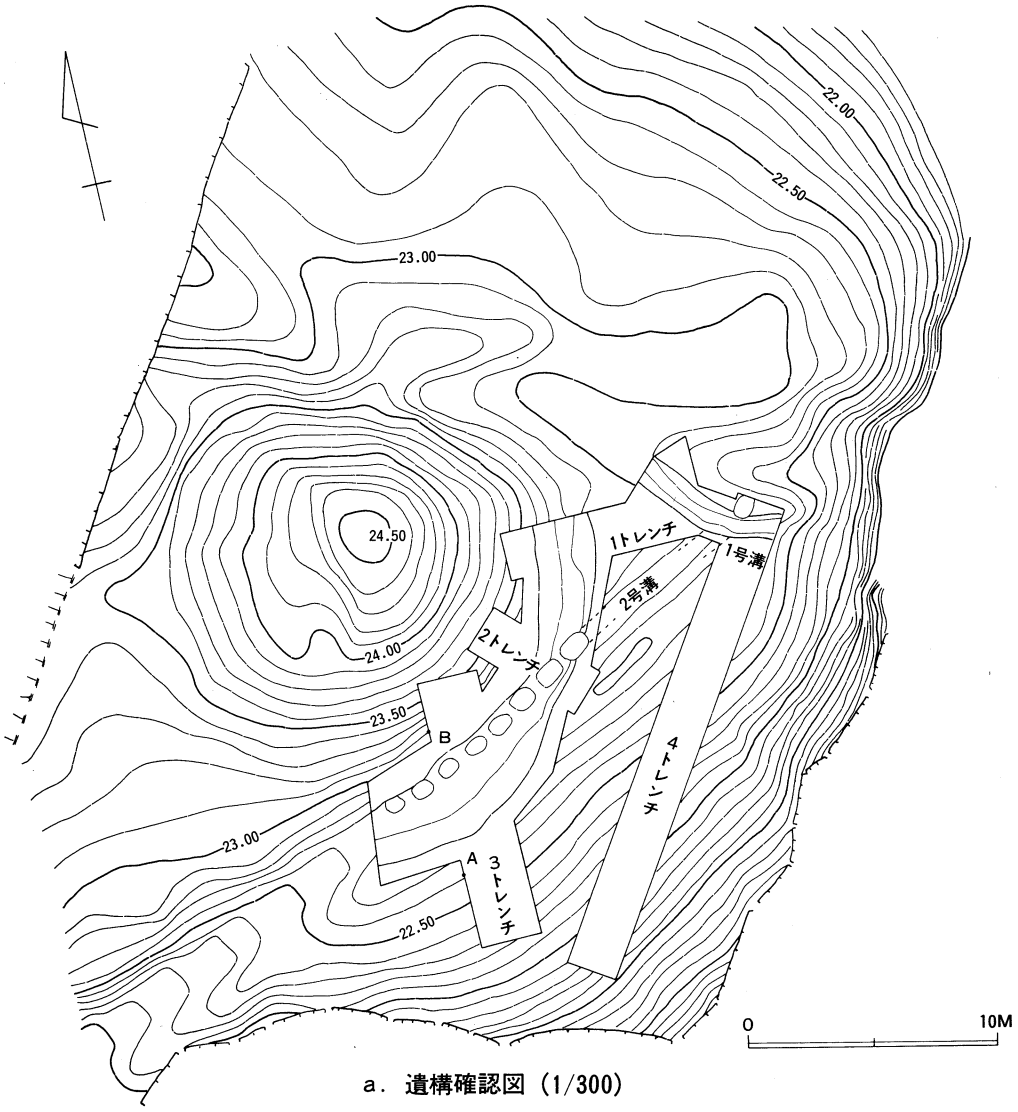
遺物出土状況（周溝）

調査の概要　今回の調査では、古墳の東から南部分における周溝と、時期不明の溝２条を確認した。１号溝は、４トレンチの遺構確認の際、北側隅に確認した。規模は、確認面において幅1.0～1.3m、深さ約50～60cmで、覆土は黒色土（ローム粒含み粘性有り。しまっている。）を主体とする。２号溝は、古墳の周溝を掘り下げた結果検出された遺構で、壁の立ちあがりについては不明である。底面には、30～50cmの間隔をおいて隋円形状の凹みが直線的に配置されている。凹みの規模は長辺80～100cm、短辺60～90cmで深さは11～14cmである。古墳の墳丘裾部、周溝、１号溝を切っている。古墳の周溝は、東側において墳丘裾部、周溝の壁の立ちあがり等良好であるが、南東～南側においては、２号溝によって墳丘裾部、周溝の壁の立ちあがりと底面の攪乱を受けている。規模は、確認面において幅2.3～2.5m、深さ45～55cmである。断面は壁が穏やかに立ちあがる逆梯形状となる。覆土（第６図）は黒褐色土を主体とするもので、１．表土、２．暗褐色土（ローム粒＋黒色土、しまっている。粘性に欠ける。）、３．黒褐色土（ローム粒少量含みしまっている。粘性有り。）、４．暗褐色土（ローム粒含みしまっている。粘性有り。）、５．茶褐色土（ローム粒主体、少量黒色土を含む。）の堆積状況である。また、周溝東及び南東部分において３層下部より焼土層の堆積が見られた。遺物は土師器の小破片が主でいずれも底面より30～50cm程度浮いた状態で検出されている。位置的には、周溝南部分の底面から壁立ちあがり付近に多い。遺物は、小破片のため全て復原実測（第７図）である。１は、土師器坏で口径20.0cm、底部を欠損するが、２の底部が同一個体である。ロクロ使用で外面は、体部中位～下位に回転ヘラ削り整形、内面は黒色処理を施こし、横方向のヘラ磨き調整がなされる。２は、１と同一個体で、底径6.2cm、回転糸切りによる切り離し後底部周縁を回転ヘラ削り整形する。内面は、ヘラ磨き調整後黒色処理を施こす。３は底径6.9cmで切り離しは不明だが、底部周縁を回転ヘラ削り整形する。４は高台付坏の高台部で底径8.8cm外面はナデ整形、内面はヘラ磨き調整されている。５・６共に甕口縁部で５は口径15.6cm、残存高4.3cmはロクロ未使用で単純口縁である。６は口径23.0cm、残存高5.2cm、胎土に雲母を混入する常陸型の甕である。ロクロ使用で内外面ともナデ整形している。７は、ロクロ使用の土師器坏で口縁部外面に墨書されている。最後に当遺跡の基本層序は、１．表土、２．腐食土、３．茶褐色土（ローム漸移層）、４．ソフトロームとなっている。深さは１層で20～30cm、２層で10～15cm、３層で10～15cmの厚さをもつ。遺構確認は３層において行った。

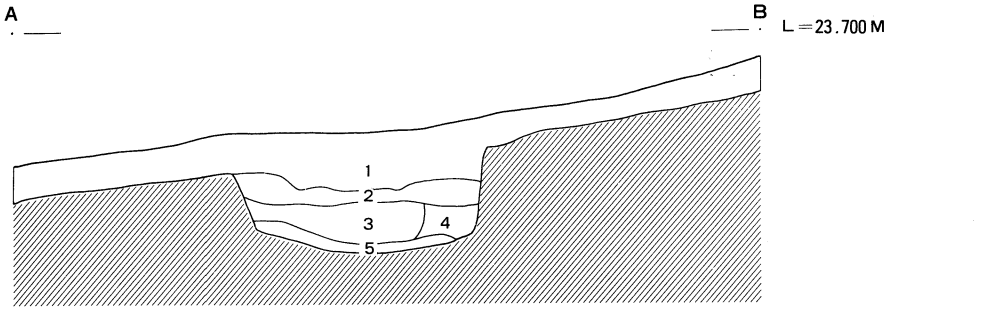
小　　結　以上概要を述べてきたが、今回の調査においては、古墳の築造年代、埋葬施設等を裏づける材料は確認できなかった。ただ周溝内覆土の土師器片については、周溝の埋まる過程と考え合わせて今後の調査によって明らかにしていきたいと思う。　（森　竜哉）



第５図　菅地ノ台古墳測量図（１：200）

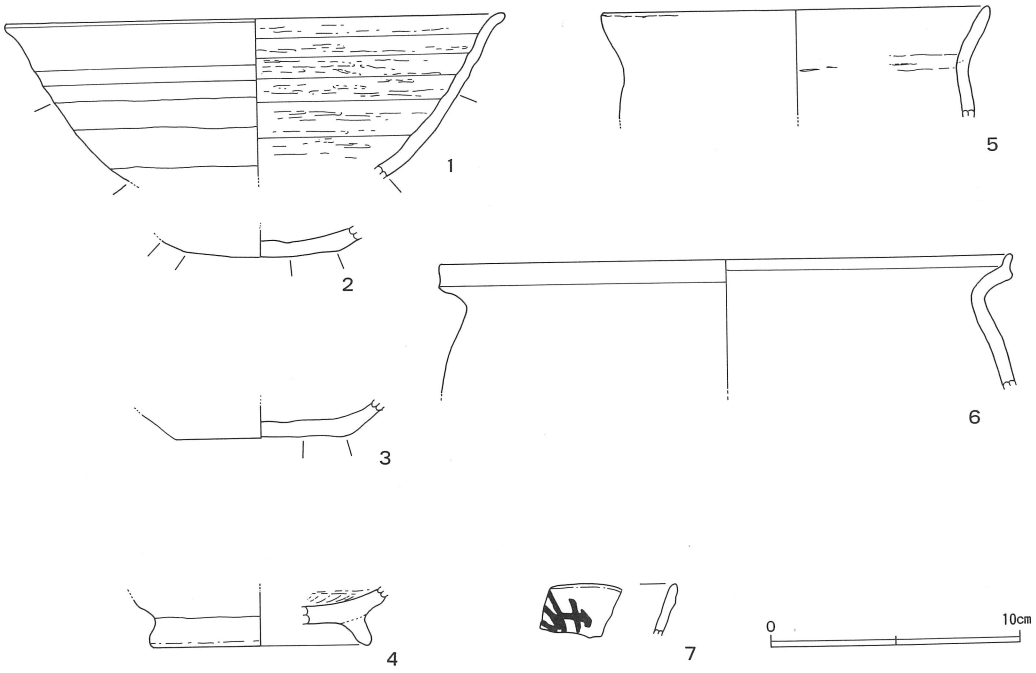


a．遺構確認図（1/300）



b．土層断面図（1/60）

第６図　菅地ノ台古墳実測図

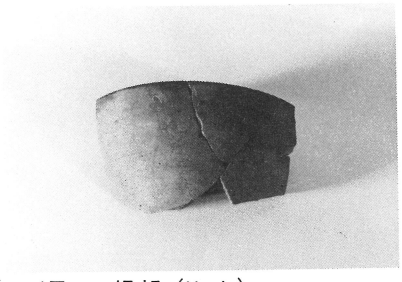


第７図　菅地ノ台古墳出土遺物実測図

図　版　5　菅地ノ台古墳

周溝完掘状況

第４トレンチ完掘状況



坏・口縁部（No.１）

坏・底部（No.２）

調　査　組　織

調査主体者　大熊章一（八千代市教育委員会教育長）

事　務　局　篠原三郎（八千代市教育委員会社会教育課長）
菊島一利（八千代市教育委員会社会教育課文化係長）
木原善和（八千代市教育委員会社会教育課主事）
秋山利光（八千代市教育委員会社会教育課主事）
小平浩子（八千代市教育委員会社会教育課主事補）

調査担当者　森　竜哉（八千代市教育委員会社会教育課主事）
蕨　茂美（八千代市教育委員会社会教育課主事）

補助調査員　君塚常行（明治大学生）・白土太（流通経済大学生）

作　業　員　板倉春枝・小川奉巳・小野木恒子・川名佳子・小林建一・斉藤千代・鈴木しげ子・鈴木時子・高橋リキ子・立石勝代・立石春枝・田中美代子・徳永和江・豊田八重・鳥畑文江・中台弘吉・早瀬黄巳・村越美津子・山口キク・山口ひで・山田晃・山本みつ江・横尾八重子・吉川志代・吉川マス・吉田悦子・渡辺富美江・秋山和子・椎葉ケサエ・中台節・花島トキ・花沢文子・新谷八重・笠川明子・周郷まさ・友野雪・花島清子・長岡やす江・長岡かつ・桜井とし・金子はる・深沢はる・田久保その・花島喜久江・斉藤勝子・長岡ユキ子・藤原茂雄・桜井清・下田道子・鈴木一枝・下田成代

整　理　員　青山邦子・植田正子・大坪智子・勝又寿子・佐治節江・渕上妙子・見神光恵・吉田やす子・吉田幸恵・長田京子・野中則子

千葉県　八千代市
埋蔵文化財発掘調査報告

印刷日　1988年３月25日
発行日　1988年３月31日
発　行　　八千代市教育委員会
印　刷　　㈱　山　下　印　刷